

＋保健管理センターの役割

昭和四十年代から、国立大学等において、学生、職員の健康管理を一元的に行うことを目的として、「保健管理センター」が設置されてきました。本学においては、昭和四十八年四月に開かれ、現在に至っています。

大学に保健管理センターのような施設を設置しようとした主要な目的は、当初は結核を代表とする感染症対策にあったわけですが、実際、設置が始まった昭和四十年代後半は、我が国はすでに高度成長期にあり、公衆衛生の改善、抗生物質の発達などによって、細菌感染症や寄生虫は脅威ではなくなっていました。

対してクローズアップされてきたのが、以前「成人病」と呼ばれ、現在は「生活習慣病」と言われるようになった病態や、アレルギー疾患です。さらにはAIDS、また本年問題となったSARSのような新しいウィルス感染症などは、国全体を揺るがしかねない問題です。

このように、設置以来三十年が経過し、社会状況の変化に伴って疾病の傾向も変わってきました。事細かな対応は少しずつ変化しますが、学生や職員の皆さんが、健康的な生活を送れるように手助けをする保健管理センターの本質的な役割には変わることはありません。

＋病気の予防

保健管理センターの最も大切な業務に健康診断があります。

若い学生の皆さんは、普段、身体の調子が悪いわけでもなく、定期健康診断を煩わしく思う人もいるかもしれません。診断書を発行してもらうためにやむをえず受けているという人も多いでしょう。しかし、職員の方も含めて、そのところをもう少し積

極的に考えていただきたいと思っています。

自分自身のからだの状態に興味をもって、防げる病気は防いでいかねばなりません。健康診断は受身ではなく、自分の健康管理のために積極的に受けて、血液検査の意味、結果なども自分で理解いただきたいと思っています。

保健管理センターでは、健康診断の事後指導を積極的に行って、病気を防ぐことに力を入れています。社会の高齢化に伴って、国民医療費の増加は避けられない事態となり、国民皆保険を維持するためという理由で健康保険の自己負担率もどんどん上がって

＋ これからの 保健管理 センター

保健管理センター・所長
辻井啓之

います。

若いうちから、からだや病気についての知識を持ち、生活習慣を改善しましょう。糖尿病・高血圧・高脂血症・内臓脂肪肥満は、「死の四重奏」と言われる病態です。さらに喫煙、過度の飲酒などが加わると、ますます致命的な病気のリスクが高まります。自分の健康は自分で守るという意識を持ち、病気になったらなった時のことという感覚からはそろそろ脱するべきではないかと思っています。

保健管理センターでは、身長・体重・体脂肪計や自動血圧計、またマッサージ機、ボデイソニックなどのリラクゼーション機器、エアロバイクやトレッドミルなどのフィットネス機器が用意してあります。

＋こころの問題

メンタルヘルスに関して、保健管理センターが果たすべき役割は、年々大きなものとなっていると言っています。従来本センターでは、カウンセラーを本学教官の三名の先生（北村陽英教授、玉瀬耕治教授、杉若弘子助教授）にお願いしていました。が、この三名の先生に加えて、本年七月から、週一回三時間、非常勤カウンセラー（酒井敦子先生）に来ていただくことになりました。

どんな些細なことでも、悩みがあれば人に話すことだけでずいぶん楽になることがあります。思い切った相談さえすれば、それが解決へのブレイクスルーになるのです。

来年度からの国立大学法人化も決まり、大学経営の前途には厳しいものが予想されますが、保健管理センターは、できうるかぎり学生や職員の皆さんの健康維持を後押ししていきたいと思っています。

